

からかいの主観的理解：
役割と他者への一般的態度の影響

遠藤由美

Subjective construction of teasing:
Role in teasing and generalized attitude toward others

Yumi ENDO

Abstract

Teasing constitutes ambiguous interpersonal behavior that some people perceive to be fun and other people view as hostile. These perspectives might reflect the views of teasers and targets, as well as individuals' generalized attitude toward others. The present study examined the effects of attachment styles as generalized attitude toward others and the role in teasing (teaser vs. target) on the subjective construction of teasing incidents. A group of 148 undergraduates participated twice, within an interval of about 3-months. They were asked to relive their experiences of a teasing incident either as a target or as a teaser from their past memory, and to complete various questions about them. The results showed that only targets with avoidance attachment style regarded their experiences very negatively, whereas targets with secure attachment style as well as teasers perceived less negative message in teasing words. These results suggest that roles in a teasing situation and individual differences with respect to generalized attitudes toward others result in different subjective constructions of teasing.

Keywords: teasing, role, generalized attitude toward others, attachment style, subjective construction

抄 録

からかいは曖昧で多義的である。からかいは問題行動だとされる一方で、親密な関係において社会的絆を深める関係促進効果を持つという指摘もある。本研究は、役割（からかう者 vs からかわれる者）と他者への一般的態度としての愛着スタイルがこのようなからかいの主観的理解に影響することを示す。大学生148名の参加者は3ヶ月の間隔において、2回質問紙に回答した。彼らは、1回は誰かからかわれた経験を、他の1回は誰かをからかった経験を思い出すよう要請され、それぞれ経験をどのように理解し評価しているかについて回答し、からかいへの一般的態度などの質問項目へも回答した。その結果、自分の役割によってからかいに対する認知が異なり、とくに回避型の愛着スタイルをもつ者は、からかわれた時は相手のことばに否定的評価を読みとっていたが、からかう側に立った時にはより肯定的にとらえていた。安全型愛着スタイルを持つ者においては、このような役割による違いは認められなかった。安全型愛着スタイルの者は、からかい一般に対して肯定的な態度を示し、日常的にからかわれる経験が多いと報告した。このような結果は、からかいにおける役割と他者に対する一般的態度の個人差が、個別のからかいに対する主観的理解を異なるものにして示唆する。

キーワード：からかい、役割、他者への一般的態度、アタッチメント・スタイル、主観的構成

からかいは、日常的行為とって過言ではない。からかったりからかわれたりした経験を一度も持たない人は稀であろう。からかいは、落語や漫才のみならず、日本のいわゆる「お笑い」には不可欠の要素である。「お笑い」が強い支持を維持していること、また我々の周囲を見渡しても日常の社会的相互作用において容易に観察することができることから、からかいは極めて日常的で普遍的な社会的行為だといえる。

このように発生頻度が高くありふれた日常行為であるからかいは、教育関係機関や関係者から、問題視されている。文部科学省（2006）の「生徒の問題行動」に関する報告書、あるいは総理府のセクシュアル・ハラスメントに関する報告書（2002）の中では、それらの問題行為を分類し、からかいがもっとも頻度が高いものであることを告げ、注意を促している。からかいは、その対象者に向けられた言語的攻撃行動であり、有害な帰結をもたらすことを指摘する研究者は多い（例：Roberts & Coursol, 1996）。確かに、からかいは国語辞典によれば、「冗談を言ったり困らせたりして、人をなぶる。じらし苦しめる。揶揄する」【岩波書店 広辞苑第五版】と定義されている。つまり、からかいは、本質的に他者に向けられた攻撃行動とみなされ、問題行動として位置づけられているわけである。

他方、からかいを肯定的な社会的相互作用として把握する立場がある。たとえば、からかいは親子や恋人同士など親密関係において発現することに注目し、笑いの共有を通して、親密感情や愛情を確認しあうと主張する者もいる（例：Eder, 1993；Eisenberg, 1986）。確かにからかいは、それまで見知らぬ他者同士だったものの間で、あるいは、緊張や一定の形式を伴う高度に公式の関係において、発生することはほとんどない。からかいは多くは、少なくとも知人、もしくは友人、親友、親子、恋人の間でかわされると報告されている（Kowalski, 2000；2001, Endo, 2007）。

我々の周囲でからかいは観察されるのは、親しい交流においてであることが多い。このことは重要である。というのは、からかいは親密な間柄で発生し、親密度が極めて低い関係ではあまり見られないということは、からかいは当事者間の関係をただ深めるというより、親密であることが相互に確認できている間柄においてのみ許され、そのような場合にだけ相互関係を深化させる機能をもつことが考えられる。反対に、そうでない場合には、からかいは先に指摘にもあるように、受け手にとっての攻撃として受け止められる厄介さを秘めているものかもしれない。この危険性ゆえに、親密性が相互に確認されている間柄でそれが発せられたときには一層、「本来はふつうは言うのを控えるような危険なことばかもしれませんが、私はあなたが誤解をせずにこのからかいと受け止めてくれると信じています。なぜなら、あなたを好きだという私の気持ちをあなたはよく知っているはず、と

思っているからです」、という相手へのメッセージとなるのではないか。相手を傷つける危険性の低いことば、いわゆる毒のないことば、たとえばストレートな賛辞などは、自分たちの関係に関するそのような秘密めいた前提をあまり必要としない。逆に言えば、からかいは特別によい関係でのみ成り立つがゆえに、それがそのような関係において発せられた時には、表面上のメッセージとは別の、関係性認知に関する裏メッセージを伴い、それを受け手が読み取るために、親密な関係の確認と深化の機能をもつ、と考えられる。すなわち、「親密度が低い（多くの他の）関係とは違って、あなた（受け手）は私（話者）にとって大切に親しい人であり、だからこそ、こうして気を使わずにからかうことができるのですよ」ということになり、からかいあえるほどに親しいということを当事者同士が相互に確認するものとなる。それゆえ、毒ともなりうるメッセージが快経験として共有され、関係を促進する機能を持ちうるのであろう。Shapiroとその協同研究者たちは、からかいは、攻撃とウィット、曖昧性が混じり合った合成物である（Shapiro, Baumeister, & Kessler, 1991）と述べているが、そのような特質ゆえに、特定の条件が整った中でのからかいは関係促進機能をもち、その条件を欠いたときからかいは毒として攻撃性の側面が発現するのだと考えられる。

だが、問題が残る。今、話を単純化するために2者関係だけを考えよう。親しい間柄でならからかいは関係促進的に働くとしても、問題は、関係を結んでいる2者の把捉する「関係」が、同じとは限らないという点にある。アナロジーとして、今AとBが2人の間にあるリンクLを眺めていると仮定しよう。AはLを20mほどもあると思いBを遠くにいる人とみなし、他方、BはLを1mほどだととらえ、Aをすぐ近くの人だとみなしている。この場合、Lという2人の間の距離のとらえに相互にズレがあることになる。からかいでこのことが問題になるのは、前述したように、毒を含みそれゆえ他では言わないような発現を特定の関係においてのみ発言することによって、毒を共有された笑いに転換する構造を含んでいるからである。つまり、言語的攻撃性を含む発言が親密性を改めて確認し深化させるものへと転換するためには、この発言が認められる・許容される関係にあることを認めあっていることが前提になる。しかし、実際には、親密度という次元そのものが物理的距離よりもさらに曖昧性が高いがゆえに、双方による関係認知は必ずしも一致しないこともあるだろう。話者がこれは親しい仲だから、このことばは「よいからかい」として受け止められるだろうと思ひ、他者受け手の方は、それほど親しくはないからこの発言は自分に対する攻撃性を含んだものに違いないと解釈するなら、からかいは容易に対人葛藤・対立の原因になりうる。しかしながら、双方の関係性認知がどの程度かを正確に把握するの

は困難である。2者間にある程度のある関係がある場合、日常的交流において、関係性認知を相互に確認する機会がまったくないわけではない。たとえば、誕生日の贈り物をする、元気づけるなどの言動を手がかりとして、相手からどの程度親密な他者としてみなされているか、ある程度推測できるかもしれない。しかし、推測に対して確信をもつことはなかなか困難であり、また関係性は変動しうるから、自分の関係性認知が相手のそれと同じ程度だと断言はできないだろう。

近年、からかひの理解を分かちつ要因として、役割が注目されている。ここでいう役割とは、からかひの送り手と受け手という立場のことである。Kowalski (2000) は、からかひの意味・理解は受け手と送り手の間で大きな隔たりがあることを指摘した。感情や思考など心的活動の過程およびその産物は人の心の中にあり、したがって当人には容易に接近しやすい情報として利用されることが多く、種々の判断バイアスや錯誤をおかしてしまうことを、最近の社会的判断・推論の研究は明らかにしつつある（例：遠藤, in press ; Keysar, Barr, & Horton, 1998 ; Kruger, 1999 ; Windschitl, Kruger, & Simms, 2003）。からかひにおいても、話者は自らの発話が悪意のない、むしろ“冗談のつもりで”発せられたものであることを受け手よりも十分に知っており、他者もまた同様に理解するはずだと推測するが、他方受け手は送り手のそのような発話意図にはアクセスしがたい。そのため、からかひの送り手（発話者）と受け手との間で理解にズレが生じるのではないかと議論されている（Kruger, Gordon & Kuban, 2006）。事実、からかひにおける役割が異なり、発話者の（悪意のない）発話意図についての気づきの有無が異なると、一貫して対称的な理解をすることが実験や調査によって示されている（Kowalski, 2000, Kruger et al., 2006）。

しかし、役割だけがからかひの意味を決定する唯一の要因というわけではない。大淵 (2002 ; 2006) は、からかひが社会的関係促進機能をもつための条件として、当事者双方（つまり発話者と受け手）が十分な社会的スキルを持つことの必要性を説いた。大淵 (2006) は、『からかわれた対象が傷つかないことが原則である。傷ついてしまうなら、対象の側には怒りや恨みが、また行為者の側には罪悪感が生じ、関係はむしろ阻害される』（p.25）と述べ、受け手側が否定的に理解しないことの重要性を強調し、そのために社会的スキルが不可欠だということである。だが、発話者の社会的スキルがからかひ認知にどのように働くのかについて、直接述べてはいない。遠藤 (2007 ; Endo, 2007) はからかひにおける役割と社会的スキルを交絡させて検討し、社会的スキルが低い者がからかひを受ける立場に立つと、社会的スキルが高い者に比べて、また発話者に比べて、発話者のからかひを著しく否定的に理解することを報告した。すなわち、発話者としてからかひを誰かに向けるとき、

社会的スキル水準が「相手が傷つくだろう」という推測の違いを生み出すことはなく、社会的スキルの高低にかかわらず話者は「冗談だと受け止めてくれるはず」と考える。他方、受け手のからかい認知には、社会的スキル水準が効果をもち、社会的スキルの高い者は話者と同じ程度に「冗談で言っている」と受け止め、傷つく度合いが低いが、社会的スキルの低い者においては、「私に向けた否定的評価」として受け止め、傷ついたと報告する傾向が顕著に認められた。このことから、大淵の言うように、受け手の社会的スキルが十分に高ければ傷つく可能性の低いことが示唆された。しかし、同時に、話者に関しては、社会的スキルよりも立場の効果の方が強力であることが示された。つまり、からかいが社会的関係促進の機能をもつかあるいは対立・葛藤の火種となるかは、ひとえに受け手の理解いかんにかかっていることが示唆されたのである。役割を参加者間要因として検討したときも（Endo, 2007）、参加者内要因として検討したときも（遠藤, 2007）、結果はほぼ同様であった。

これらの研究は、役割以外に、からかいの認知を分かち要因をみいだした点において意義がある。しかし、これら研究では問題点も残った。ひとつには、社会的スキルは1項目（「私は人づきあいほうまい方だ」）で測定されており、信頼性に難点があること、2つには、スキルは技能であるのに技能そのものを測定しておらず、妥当性の観点からも難点があること、そして3つ目として、からかいという対人間行為は、受け手の社会的スキルといった個人の技能ではなく、対人的変数によって説明しようとするのがより適切であろう、というものである。つまり、先に指摘した対人間の親密度に対する認知に影響する要因は、まだ検討されていないのである。

そこで本研究においては、対人的変数として、成人愛着の型、いわゆるアタッチメント・スタイルに注目する。成人愛着理論は、子どもが養育者に対して示す愛着（Bowlby, 1969, 1973）と、青年期以降の恋愛関係にある人々が示すパートナーへの態度に多くの類似性があることに注目し、恋愛の個人差を説明する枠組みとして提唱された（Hazan & Shaver, 1987; Shaver & Hazan, 1993）。Bowlby（1969, 1973）の愛着理論は母子分離場面での子ども反応に基づいて母子関係を分類しているが、Hazan and Shaver（1987）もこれに準じ、恋愛におけるアタッチメント・スタイルを安定型（secure）、回避型（avoidance）、不安型（anxious）の3種類に分類した。我が国でも、この枠組みに基づいた恋愛研究がおこなわれている（例：金政, 2002, 2003; 若尾, 2002, 2005）。しかし、最近、成人のアタッチメント・スタイルは、単に恋愛という特定の関係のみならず、より広く一般的な他者に対する態度ないし志向性をあらわすものとしてみなすことができるという議論が登場してき

ている（金政, 2007）。すなわち、安定型はそもそも一般的に対人関係において関係不安や親密性回避傾向が低いことをあらわし、それゆえ積極的に他者との関係を構築し、維持していくことができる。これに対して回避型は、概して他者とは自分に脅威を与える者という前提に立ち対人関係を結ぶことに対して回避的である。そして不安型は、まさしく両者の中間であり、他者と上手に心地よい関係を結ぼうとする志向性はあるものの、よい人間関係を結べるかについては確信がもてない。このような他者もしくは関係性に対する態度・志向性は、恋人のみならず、さまざまな人とのつながりを形成・維持しようとする動機づけや方略の違い、さらには関連情報の理解の仕方に関わるだろうと考えられる。

本研究は、對他者への一般的態度としてのアタッチメント・スタイルに注目し、からかいをどのように理解するか、あるいはからかいというものを一般的にどのように考えているかについて検討することを目的としておこなわれた。その際、社会的判断・推論の研究が明らかにしているように、からかいの発話者もしくは行為者は、自らの内なる意図や思考の接近可能性（accessibility）が極めて高いため、（よほど、悪意があることを自覚しながら発するからかいを例外として）、悪意がなくむしろ冗談の1種と思いながら発するからかいが多いと仮定するならば、発話者においては、アタッチメント・スタイルによってからかい認知が異なることはないだろうと予測される。反対に、もし対象者との距離がそれほど近くないと判断したなら、話者はからかいを発しないと考えられる。したがって、話者によるからかい認知は、発話者という役割の効果が極めて強いと考えられる。しかし、受け手になった場合、その人がどのような一般的対人態度をもっているかによって、からかいへの受け止め方・理解の仕方が異なるだろう。なぜなら、一般的対人態度がそもそも否定的であれば、他者は近しくなく脅威になりやすいと考えているため、攻撃とも愛嬌ともとれる多義的な発話を受け取ったとき、それを攻撃として解釈する傾向が高いと考えられるからである。そして逆に、一般的対人態度が基本的に肯定的で、基本的に他者は安全で楽しさをもたらすポジティブな存在として捉えているのであれば、攻撃とも愛嬌ともとれる多義的な発話は、愛嬌や冗談として受け止める可能性が高いと考えられるからである。そこで、本研究では、からかい認知において、役割（からかう者、からかわれる者）と一般的対人態度としての愛着スタイルとの間に交互作用があり、からかいの受け手において、一般的他者への態度が肯定的であるか否定的であるかの影響がみられる、と予測するものである。

方 法

参加者：私立大学の大学生が、2度にわたって実施された質問紙実験に参加した。1回目の協力者は223名であった。約3ヶ月後、2回目の質問紙実験が実施された。また、これらの質問紙とは別に、年度当初に、アタッチメント・スタイルなどの項目についての調査を実施しておいた¹。合計3回の質問紙においてそれぞれ、回答者の携帯電話の番号の下3桁、誕生日、性別、学生番号の下1桁、さらに出身小学校名の頭1文字の情報を収集し、これらに基づいて回答者のマッチングがおこなわれた。最終的に同一参加者による回答として同定され、かつ主要変数において回答不備がなかった者は、141名であった。本研究では、これら141名（男子49名、女子92名）を参加者と呼ぶ。

手続き：Teaser経験記述用とtarget経験記述用の2種類の質問紙が作成された。学生番号が奇数の参加者は1回目にtarget経験を記述し、2回目はteaser経験記述課題が割り当てられた。学生番号が偶数の者は、逆の順序で課題が割り当てられ、2回目はtarget経験記述課題が割り当てられた。最終的に前者は141名中の69名、後者は72名であった。なお、2回目実施については予告しなかった。

Teaser経験記述用の質問紙では、「誰しもからかったりからわれたりした経験をもっていることでしょう。これまでを振り返って、誰かをからかった経験を1つ思いだし、以下の質問に回答してください」と教示した。回答者の負担を軽減するために、teaserとtargetの関係、からかいの主題については選択肢を用意し、1つ選択するように求めた（Appendix 2参照）。次に、どのようにからかったか、できるだけ正確に記述するように求めた。その後、「相手を傷つける（-3）」か「相手を楽しませる（+3）」、そして「相手への否定的感情のあらわれ（-3）」か「相手への肯定的感情のあらわれ（+3）」について、それぞれ7段階尺度上で回答を求めた。

もう1種類の質問紙は、target経験を記述しそれに対する認知を回答するためのものであった。教示および質問はteaser用と基本的に同じであるが、用語はtarget経験に適合するように、表現が適宜修正された。

この他、からかい経験の頻度（「私は、誰かをからかうことが多い」）、からかわれ経験の頻度（「私は、誰かからからかわれることが多い」）の2項目、そして、からかい一般に

1 年度当初に実施した学生の基礎資料収集目的の質問紙は、アタッチメント・スタイルに関する質問項目の他、他の実験や調査で使用するための測度も一緒に共存するものであった。これらは個人情報を守るために匿名とし、誕生日や性別、学生番号の奇数・偶数、きょうだいの有無、卒業した小学校の第1文字について尋ね、個人が特定できないように配慮した。

対する態度を測定するため以下の6項目を加えた：①相手と親しくないと、からかいは起きない、②からかいは、人生を楽しくするちょっとしたスパイスのようなものだ、③からかいは、相手との関係をより親密にする、④からかいは相手への攻撃だ（※逆転項目）、⑤からかいは、人間関係を壊す（※逆転項目）、⑥からかいはいかなる場合も許されない（※逆転項目）。これらの項目では、「全くそう思わない(1)」から「とてもそう思う(7)」までの7段階尺度で評定を求めた。

なお、アタッチメント・スタイルはHazan & Shaverの3タイプ尺度を用いて、強制選択で回答を求めた（Appendix 1 参照）。

結 果

参加者の分類：アタッチメント尺度への回答により、参加者を3つのタイプに分類したところ、安全型は43名、回避型は34名、そして不安型は64名であった。

個別のからかい経験に関する認知

個別の体験記入後に回答した「当該のからかいが受け手を傷つけるものであったか」そして「受け手への否定的感情のあらわれであったか」否かというからかい認知の2項目のそれぞれについて、2（からかいにおける役割：target, teaser）×3（アタッチメント・スタイル）の分散分析を実施した。前者は参加者内要因、後者は参加者間要因である。受け手を傷つけるものであるかについては、役割の主効果が有意であった（ $F(1,138) = 4.34, p < .05$ ）他、役割とアタッチメント・スタイルの交互作用が有意傾向となった（ $F(1,138) = 2.36, p < .1$ ）。単純効果の検定をおこなったところ、teaser条件においては、安全型、回避型、不安型の平均値（標準偏差）は順に、4.16 (1.90), 4.24 (1.33), 4.02 (1.50) であり、アタッチメント・スタイルによる違いは認められなかった。これに対してtarget条件においては、アタッチメント・スタイルによる違いが有意となり（ $F(2,138) = 3.56, p < .05$ ）、からかわれた時安全型（ $Mean = 4.33, SD = 1.74$ ）は回避型（ $Mean = 3.44, SD = 1.40$ ）や不安型（ $Mean = 3.56, SD = 1.78$ ）に比べてteaserのメッセージを、「楽しませるもの」としてそれを理解していた（ $p < .05$ ）。回避型と不安型の間に違いは見られなかった。つまり、安全型の者がからかわれた時、からかいをよりおもしろいとみなしたが、回避型や不安型は相対的にそうでなかった。

次にアタッチメント・スタイル別の単純効果の検定をおこなったところ、回避型でのみ役割による有意な違いが認められ（ $F(1,138) = 6.99, p < .01$ ）、teaserは受け手が楽しみと

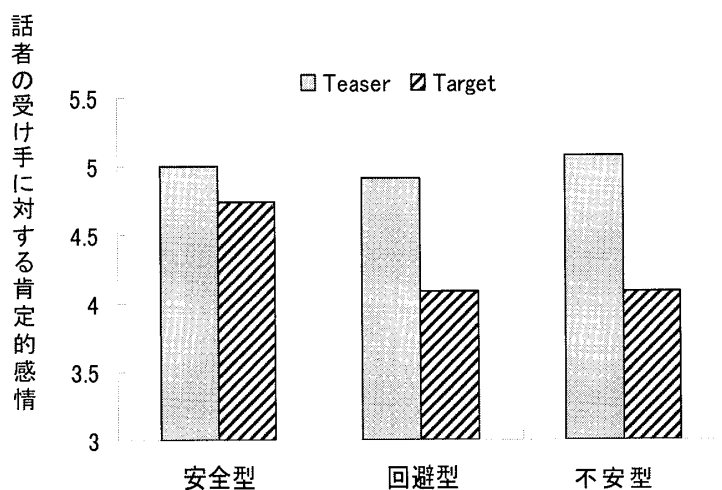


図1 アタッチメント・スタイルと役割の関数による、からかい経験の解釈

して受け止めたと考えがちであったが、targetは相対的に傷つけるものとして受け止める傾向があった。しかし、このような役割による違いは安全型や不安型では認められず、受け手の立場に立つときも話者の立場に立つ時どちらも同じ程度に考えていた。

からかいから、話者の相手へのどのような感情を読み取るかについて、2 (役割) × 3 (アタッチメント・スタイル) の分散分析を実施した。その結果、役割の主効果が有意 ($F(1,138) = 21.19, p < .001$)、および役割と社会的スキルの交互作用が有意傾向となった ($F(1,138) = 2.40, p < .1$) (図1)。単純主効果の検定をおこなったところ、target条件とteaser条件の双方において、アタッチメント・スタイルによる違いは認められなかった。他方、アタッチメント・スタイル別に役割条件の検討をおこなったところ、安全型では役割による違いが認められず、teaserの理解とtargetの理解とに違いがあるとはいえなかった。しかし、回避型と不安型においては受け止め方に役割による有意な違いが認められ、ともに、teaserに比べてtargetの方がより否定的に理解していた (回避型、不安型の順に、 $F(1,138) = 7.58, p < .01$; $F(1,138) = 9.14, p < .01$)。

からかいへの一般的態度

からかいに対する一般的態度を測定するための6項目に対して因子分析 (主成分分析) をおこなったところ1因子となり、クーロンバックの a 係数も十分な高さを示したので ($a = .808$)、得点が高いほうがより肯定的態度となるように得点化し、6項目の合計得点をもって、からかいというものに対する一般的態度得点とした。

アタッチメント・スタイルによって、からかいへの一般的態度が異なるか否かについて、

1 要因3水準の分散分析を用いて検討した。その結果、アタッチメント・スタイルの主効果が有意となった ($F(2,138) = 3.21, p < .05$)。Newman-Keuls法²による下位分析の結果、安全型 ($Mean = 30.63, SD = 7.52$) と不安型 ($Mean = 28.67, SD = 6.86$)、不安型と回避型 ($Mean = 26.53, SD = 6.83$) の間には有意な違いは認められなかったが、安全型と回避型は5%の有意水準で違いが見られた。すなわち、アタッチメント・スタイルによってからかいというものに対する態度が異なり、安全型がもっとも肯定的な態度をもち、逆に回避型がもっとも否定的な態度をもち、不安型はその中間であった。

からかいへの一般的態度が肯定的であるか否かと、自分の個別のからかい経験の解釈の肯定性とは関係するか否かを検討するために、からかいへの一般的態度とからかい認知の2項目(傷つくか項目、相手への否定的感情のあらわれと解釈するか)との相関係数を算出したところ、それぞれ $r = .457, p < .001$, $r = .492, p < .001$ と中程度の正の相関関係が認められた。一般にからかいを否定的に考えている者は、自分に関わるからかいにも否定的な意味を付与していたことになる。

からかう、からかわれるという経験の多さ(の自己報告)とからかいへの一般的態度の関係を検討するため、相関係数を算出した。その結果、からかいへの一般的(肯定的)態度は、からかい経験の多さとは $r = .307, p < .001$, からかわれ経験の多さとは $r = .201, p < .01$ で、それぞれ低いながら有意な相関関係にあることが認められた。

からかう、からかわれるという経験の豊富さがからかいへの一般的態度と関連していたので、次に、経験の豊富さがアタッチメント・スタイルによって異なるか否かを検討した。1 要因3水準の分散分析の結果、からかう経験ではアタッチメント・スタイルの主効果は有意ではなかったが、からかわれる経験では主効果が有意となった ($F(2,138) = 4.38, p < .05$)。下位検定をおこなったところ、回避型 ($Mean = 3.74, SD = 1.78$) だけが安全型や不安型(それぞれ $Mean = 4.49, SD = 1.55$; $Mean = 4.69, SD = 1.38$) に比べて、有意にからかわれ経験が少なかった。

からかい認知のモデル化

本研究では、アタッチメント・スタイル、からかいへの一般的態度、役割、そして個別のからかいをどのように解釈したかについての変数がある。これらを用いて、からかいへの認知解釈が、どのような要因によってどのように構成されるか、モデル化を試みることにした。役割がからかい解釈に関係することは既に本研究においても、また先行研究にお

2 以下、特に断りがない限り、下位検定にはNewman-Keuls法を用いた。

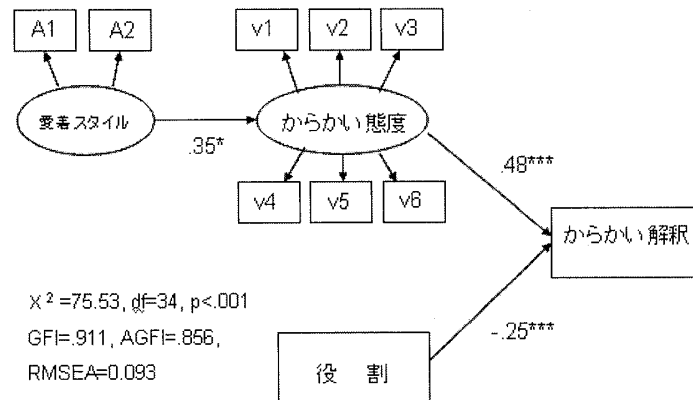


図2 愛着スタイル、からかい態度、役割とからかい解釈の関係

いても確認されている (遠藤, 2007; Endo, 2007; Kruger et al., 2006)。そして、からかいへの一般的態度も個別のからかい経験の解釈と関係があることが、本研究で示された。アタッチメント・スタイルによる違いも示された。これらを考慮し、ここでは2つのモデルを考えた。モデル1は、アタッチメント・スタイルがからかいに対する一般的態度に影響し、一般的態度が個々のからかいへの解釈に影響する。そして、受け手が発話者かという役割は、これらとは独立にからかいへの解釈に影響する、というものである。モデル2は、アタッチメント・スタイルがからかいへの一般的態度に影響するが、同時に直接個別のからかいへの解釈に影響すると考える点において、モデル1と違いがある。Amos7.0を使用して、これらのモデルの検討をおこったところ、適合度に関する指標は全般によくかつ両モデル間でそれほど大きな違いは認められなかったが、モデル2におけるアタッチメント・スタイルから個別からかい解釈へのパス係数は有意にはならなかった ($p = .65$)。このような結果から、からかいの解釈はモデル1のような構造によって、うみだされるのではないかと示唆された (図2)。

考 察

本研究では、同一の参加者からからかい経験とからかわれ経験の双方のデータを収集し、からかいにおける役割とアタッチメント・スタイルがからかいできごとの意味解釈に与える影響を検討した。その結果、これまでの研究 (Endo, 2007, 遠藤, 2007) と同様に、これら2つの要因の間に交互作用が見られ、からかいの中での立場によって、個人変数の効き方に違いがあることが示された。からかいの発話者の役割にあるとき、人はアタッチメント・スタイルすなわち、一般に他者を自分とはよい関係を結びうる対象とみなしている

か否かにはかかわらず、自分の発するからかいは、おもしろさを共有するためのものであり、また相手（からかいの対象）に対して否定的な感情をもっていないから発するのだと理解する楽天的な傾向があった。他方、からかいの受け手つまり対象者としての役割に立つと、自分に向けられたからかいをどのようなものとして受け止めるかには、アタッチメント・スタイルによって異なっていた。3つのアタッチメント・スタイルのうち、安全型は自分に向けられたからかいを相対的に好意的・肯定的に解釈し、対照的に回避型は自分へのからかいの背後に相手の自分に対する脱評価または低評価を読み取っていた。そして、不安型は、安全型と類似した反応を示したり、逆に回避型の反応と類似した反応を示すというように、項目によって反応のブレが見られた。これは、不安型が、文字通り、他者との良好な関係を求めながら、そしてなかばそれを実現しつつも、他者と自己との関係が確実にうまくいくことに確信を持たずにいることのあらわれと考えることができる。

このように、メッセージの送り手の役割に立つ時には、他者や関係性に対する態度・信念の影響がなく、メッセージの受け手の役割に立つ時には、それが強く影響することが、先行研究（遠藤、2007；Endo, 2007）に引き続いて、また社会的スキルという片や技能であり片やアタッチメント・スタイルという他者への一般的態度ないし関係性への態度であるという違いを超えて、確認されたのは意義深い。これらの個人差変数が、いずれも受け手の立場に対して効力を発するということは、社会的判断・思考の研究者らが論じるように、自己中心性という人のもつ認知傾向が強力であることを示唆している。すなわち、人は自分の思考や感情については接近可能性が高く容易に利用しやすいためにそれを用いて判断を下すが、他者はそれとは異なる認知環境にいることに思いが至らず、他者も同様にそれを共有しているだろうと錯覚を犯しやすい。そのため、自分の発するからかいは悪意や邪気がないことを自分はよく知っており、他者（受け手）もまたそうであろうと考えてしまうようである。

アタッチメント・スタイルと役割の交互作用に関して、もう1点興味深いのは、役割によるからかい解釈の違いが安全型ではみられないのに対して、回避型では役割による違いが顕著であることである。本研究では、同一の参加者に対し役割を違え長い間隔をおいて2度回答を求めている。同一の参加者であるから、teaserとtarget条件ではたとえば文化が異なる（例：攻撃性の高い交流をする文化、攻撃性が低い交流をする文化など）など、何らかの要因における群間差による違いである可能性は低い。Teaser役割ではアタッチメント・スタイルによる違いがなく、また安全型では役割の違いも見られないということは、安全型では、どちらの役割においても、からかひに対して概して同程度に肯定的な解釈を

する傾向があるのに対して、回避型では、自分がからかう立場に立つときにはからかひを肯定的にとらえていたのに、からかわれるとそのことを忘れて、相手からの否定的メッセージとして受け止めてしまうことを示している。つまり、言う時には気にしないが、言われると傷ついてしまうという非対称性が、回避型で顕著にみられるわけである。からかひが社会的関係促進機能をもつためには、受け手が傷つかないことだという大淵（2006）の指摘から考えるならば、受け手が安全型ではからかひが関係促進機能をもち、回避型では攻撃的な“問題行動”としてのからかひになりうる可能性があることになる。本稿の最初の方で、からかひはよいからかひと悪いからかひがそもそも存在しているわけではなく、人の受け止め方によって変化するそもそも曖昧なものであることを指摘したが、受け手のアタッチメント・スタイルによって、からかひが肯定的とも否定的ともなりうることが示された。まさに、からかひというコミュニケーションは、発話がことばを口から発した瞬間にその意味が決定しているのではなく、受け手のもつ理解枠組みによって主観的に構成され、意味が付与されるのである。

このような受け止めの違いは、からかひというものをそもそもどう考えているかからかひへの一般的態度による影響が見られた。そして、からかひへの一般的態度は、アタッチメント・スタイルすなわちそもそも他者あるいは他者と自己の関係を一般にどのように考えているかと関連していた。自分を脅かすことなくむしろさまざまな利得・恩恵（物質・金銭的な側面だけでなく、喜びを共有するなどの非物質的・金銭的側面をも含む）をもたらしてくれる存在として他者をとらえている安全型は、からかひは親しい仲でおきる毒の少ないものというからかひ態度を有している傾向があった。逆に回避型は、からかひは相手に対する攻撃であると考えていた。このようなからかひへの一般的態度が、実際に誰かからからかわれた際にそれをどのように解釈するかに影響し、回避型では自分への否定だと受け止めがちとなるということである。端的にいえば、回避型の他者を警戒する傾向がひいては、「他者からの否定感情」を読み取ってしまう認知を構成している可能性がある。Leary（1990）やBaumeister（1995）は、人には所属したいという根源的欲求があり、他者からの関係評価（relational value）——この人は自分を関係を結ぶに値する人間だと思っているかどうか——に極めて敏感に反応し、とくに、これまでの経験から受容されることに対して確信を持ち得ないものは、そのような情報に一層敏感であることを示唆している。回避型は、まさしく、これまでの対人交流経験の積み重ねの中で、脅威や不条理さや不信を感じとることが多く、その帰結として「他者とうまくいく自己」を十分に育成できなかったのではないかと考えられる。そのような他者への一般的な態度ないし信念が、具

体的にからかいの対象をなつたときに、解釈の枠組みを提供するのではないだろうか。

回避型の者は、からかわれる経験が少なかった。恐らくは、日常生活の中でからかいを交わすほどに親しい人間関係をそれほどもっていないのかもしれない。日常生活であまりからかわれることが多くない者、そして稀にからかわれるということがあっても、それを否定的に受け止め自分への攻撃だと考える傾向があるならば、他者を脅威だと考える傾向は一層強化されてしまうだろう。他者への態度、からかいというものへの一般的態度が、からかいを受けたときにどのような意味をそこに与えるかが関わっているようである。

引用文献

- Baumeister, R.F., & Leary, M. R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, 117, 497-529.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss, Vol. 1. Attachment*. The Hogarth Press.
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss, Vol. 2. Separation: Anxiety and anger*. The Hogarth Press.
- Eder, D. (1993). "Go get ya a Frenchi!" Romantic and sexual teasing among adolescent girls. In D. Tannen (Ed.), *Gender and conversational interaction*, Pp. 7-31. New York: Oxford University Press.
- Eisenberg, A. R. (1986). Teasing: Verbal play in two Mexicano homes. In B. B. Schieffelin & E. Ochs (Eds.), *Language, socialization across cultures. Studies in the Social and Cultural Foundations of Language*, No. 3, Pp. 182-198. New York: Cambridge University Press.
- ENDO, Y. (2007). Divisions in subjective construction of teasing incidents: Role and social skill level in the teasing function. *Japanese Psychological Research*, 49, 111-120.
- 遠藤由美 (2007). 役割と社会的スキルがからかい認知に及ぼす影響 関西大学社会学部紀要, 38, 119-131.
- 遠藤由美 (in press). 共有状況下での相対比較判断におけるバイアスと自己中心性の役割 実験社会心理学研究, 47, (2).
- Hazan, C., & Shaver, P. R. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- 金政祐司 (2002). 恋愛イメージ尺度の作成とその検証——親密な異性関係、成人の愛着スタイルとの関連から 対人社会心理学研究, 2, 93-101.
- 金政祐司 (2003). 青年期の愛着スタイルが親密な異性関係に及ぼす影響 社会心理学研究, 19, 59-74.
- 金政祐司 (2007). 青年期の愛着スタイルと友人関係における適応性との関連 社会心理学研究, 22, 274-284.
- Keysar, B., Barr, D. J., & Horton, W. S. (1998). The egocentric basis of language use: Insights from a processing approach. *Current Directions in Psychological Science*, 7, 46-50.
- Kowalski, R. M. (2000). "I was only kidding!": Victims' and perpetrators' perceptions of teasing. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26, 231-241.
- Kowalski, R. M. (2001). Permitted disrespect: Teasing in interpersonal interactions. In R. M. Kowalski (Ed.), *Behaving badly: Aversive behaviors in interpersonal relationships*. Washington, DC: The American Psychological Association.

- Kruger, J. 1999 Lake Wobegon be gone! The “below-average effect” and the egocentric nature of comparative ability judgments. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 221–232.
- Kruger, J., Gordon, C. L. & Kuban, J. (2006). Intentions in teasing: When “just kidding” isn’t good enough. *Journal of Personality and Social Psychology*, 90, 412–425.
- Leary, M. R. (1990). Response to social exclusion: Social anxiety, jealousy, loneliness, depression, and low self-esteem. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 9, 221–229.
- 文部科学省 (2006年9月). 生徒指導上の諸問題の現状について (2-7) いじめの様態 〈http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/09/06091103.htm〉 検索日 2006.9.20.
- 大淵憲一 (2002). 人間関係と攻撃性 島井哲志・山崎勝之 (編) 攻撃性の行動科学——健康編 Pp.17-37. ナカニシヤ出版
- 大淵憲一 (2006). いじめにおける「からかい」. 児童心理 臨時増刊 No.843 いじめの予防と早期解決 Pp. 23-28. 金子書房
- Roberts Jr. W., & Coursol, D. H. (1996). Strategies for intervention with childhood and adolescent victims of bullying, teasing, and intimidation in school settings. *Elementary School Guidance Counseling*, 30, 204–212.
- Shapiro, J. P., Baumeister, R. F., & Kessler, J. W. (1991). A three component model of children’s teasing: Aggression, humor, and ambiguity. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 10, 450–472.
- Shaver, P., & Hazan, C. (1993). Adult romantic attachment: Theory and evidences. In D. Perlman & W. H. Jones (Eds.), *Advances in Personal Relationships*, Vol. 4, Pp.29–70. Jessica Kingsley Publishes.
- 総理府. (2002年7月). 男女共同参画の現状と施策 〈<http://www8.cao.go.jp/survey/h14/h14-danjo/index.html>〉 検索日 2006.9.20.
- 若尾良徳 (2002). 成人アタッチメント研究の現状と問題——特性から関係性の概念へ—— 東京都立大学心理学研究, 12, 29–39.
- 若尾良徳 (2005). 青年のアタッチメントスタイルとパートナーとの相互作用場面における自己報告及び、行動に表出された不安との関連 和洋女子大学紀要人文系編, 45, 117–129.
- Windschitl, P. D., Kruger, J., & Simms, E. N. (2003). The influence of egocentrism and focalism on people’s optimism in competitions: When what affects us equally affects me more. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 389–408.

Appendix 1

アタッチメント・スタイルの尺度 (Hazan & Shaver, 1987より)

次の3つの文を読んで、自分に1番近いものを1つだけ選び、番号に○をつけてください。
1. 私は比較的容易に他者と親しくなれるし、人を頼ったり人から頼られたりすることも気軽にできる。自分が見捨てられるのではないかと心配することもないし、余りに親しくして来る人に対し不安を覚えることもない。
2. 他者と親しくなることは、私には何となく重荷である。私は人を心から信頼したり頼りにしたりすることがなかなかできない。私は、誰かが必要以上に親しくしてきたり、相手が親しい人でも、私が丁度よいと感じている以上に親しくなることを求められるとイライラしてしまう。
3. 私は、他者がイヤイヤ私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある。親しい人が本当は私を好きではないのではないか、私と一緒にいたくないのではないかと心配になることがしばしばある。私は他者と完全につながりたいと思うが、それが時々結果的に相手を遠ざけてしまうことになる。

Appendix 2

からかいのテーマと該当者の割合 (%)

役 割	受 け 手	発 話 者
行 動・く せ	16.2	26.9
関 係	7.4	1.5
趣 味 や 嗜 好	5.9	9.0
知 性	4.4	3.0
外 見・容 貌	45.6	44.8
家 族	2.9	1.5
そ の 他	17.6	13.4
	100.0	100.0